

JASRAC音楽文化賞

創立75周年を機に新たな顕彰制度として創設した「JASRAC音楽文化賞」は、売上や利用実績などの数字には表れない地道な活動により、音楽文化の普及発展に寄与している個人・団体・作品等に分野を問わず光を当て、その功績を称え顕彰することにより、今後の活動への励みとしていただき、わが国にゆたかな音楽風土を築くことを目的としています。

第1回JASRAC音楽文化賞

岩崎 花奈絵(いわさき かなえ)さん

顕彰理由

障害を超え、明るくひたむきにピアノに向き合い、人間を生かす音楽の力を広く世に知らしめてきた功績をたたえ、音楽の力を生きる力に変えておられる方々に敬意を表する意味も込めて顕彰する。

プロフィール

1993年生まれ。極低出生体重児として生まれた後遺症で脳性麻痺となり、四肢体幹機能に障害がある。内田（小澤）陽子氏の指導で小学1年からピアノを始め、現在は母との連弾により、主に右手の人さし指1本で奏でるピアノの演奏活動を続けている。2013年11月にウィーンで開催された「第3回国際障害者ピアノフェスティバル」で特別聴衆賞を受賞。

木戸 敏郎(きど としろう)さん

顕彰理由

邦楽・洋楽、双方に対する広範な教養で、確かな考証と斬新な手法により、伝統の世界を現代人の感性に届ける企画を精力的に手掛けてきた功績をたたえ顕彰する。

プロフィール

1930年生まれ。音楽プロデューサー。元国立劇場演出室長。伝統を創造につなげるために雅楽や聲明の古典作品を再構造化して創造につなげる音楽運動を内外の作曲家と連携しながら展開。また、正倉院の楽器や遺跡出土の古代楽器を考証して楽器として復元するなどし、その成果を海外の学会や音楽祭などで発表して好評を博している。第6回中島健蔵音楽賞特別賞、98年クラウス・ワックスマン賞(アメリカエスノムジコロジーソサイエティ)受賞。

映画「アオギリにたくして」制作委員会

顕彰理由

本映画では、主題歌や挿入歌など、音楽が被爆者の方の想いを効果的に伝える役割を果たしている。平和の尊さや命の大切さを訴えかけていく取り組みとして、原爆投下から70年になろうとしている今、顕彰する。

映画紹介

被爆者が次々に亡くなっていく今、被爆体験のない世代がその方々の想いを伝えなければならない時代になったという強い意志のもと、映画での表現が最も多くの人に伝わるとの考えから制作された。平和の語り部として生きた沼田鈴子さんの日記から彼女の想いを知った女性ライターが、そのことを伝えていく決意をするまでの物語。

第2回JASRAC音楽文化賞

長田 暁二(おさだ ぎょうじ)さん

顕彰理由

歌謡曲、童謡、民謡、軍歌に至るまで、日本の大衆音楽史を独自の視点で30年以上にわたり系統的に研究し、その成果を積極的に著作にまとめあげてきた。戦後70年となる本年には、「歌」の視点から「戦争」と「平和」を問う大著「戦争が遺した歌～歌が明かす戦争の背景～」を出版するなど、数々の記録的価値の高い著書を世に送り出し、日本の歌の歴史を後世につないだ。

略歴・実績

1930年生まれ。大学卒業後、レコード会社で長年ディレクターを務め、企画、制作者として実績を残す。一方、1980年頃から音楽文化研究者として精力的に文筆活動に取り組み、「流行歌20世紀」「日本民謡事典」など、その著書は200冊以上に及ぶ。今年6月には、明治期以降の日本の歌をその時代背景とともに幅広く記録した800ページの労作「戦争が遺した歌～歌が明かす戦争の背景～」を出版した。

木曾音楽祭実行委員会

顕彰理由

生の音楽を体験する機会の少ない山間の地において、純粹に音楽を愛する多くの人々が力をあわせて演奏家を招き、40年以上の長きにわたり手作りの音楽祭を継続してきた。町、住民が一体となった地道な取り組みが、音楽を地域に深く根付かせている。地方で質の高い文化を育てるための、一つの有効なモデルケースを示した。

略歴・実績

木曾音楽祭は、1975年に地元のクラシック愛好家たちが自主的に始めた定期演奏会から発展し、山間の町・木曾でボランティアに支えられながら毎年開催されている。

財政難などを乗り越え、1986年には実行委員会が発足し、町・地元住民・演奏家からなる運営体制を確立した。当初は体育館を会場としていたが、1990年に木曾文化公園文化ホールが完成し、以降は同ホールで開催している。演奏される機会の稀な作品や初演作品がプログラムに盛り込まれることもあり、音楽的な評価も高い。また、音楽祭実施期間の演奏家と町民との交流も演奏家から好評を得ている。

長崎県オペラ協会、OMURA 室内合奏団（創作オペラ「いのち」）

顕彰理由

オーケストラもオペラも、一朝一夕で根付かせられる文化ではなく、地方での活動の継続にはさらに大きな志が必要とされる。両団体がさまざまな困難を乗り越え、活動を継続させてきたことが、地元長崎の被爆をテーマとする創作オペラ「いのち」の東京初演に結実した。戦後70年の今年、長崎のこの2団体が、地方で文化を育てる意義を全国に発信したことの意味は大きい。

長崎県オペラ協会 略歴・実績

長崎県オペラ協会は、昭和を代表する歌手の一人、故柴田睦陸（むつむ）氏が1980年に創設。日本で最初にオペラが上演された長崎に上質の音楽文化を根付かせることをめざして活動してきた。地域貢献や教育現場へのアウトリーチも積極的に行っている。

OMURA 室内合奏団 略歴・実績

OMURA室内合奏団は、長崎県大村市を拠点とするプロの室内オーケストラ。同市出身の村嶋寿深子氏が長崎ゆかりの奏者を集め2004年に発足。今年5月には初の東京公演を成功させた。

第3回JASRAC音楽文化賞

伊藤 京子(いとう きょうこ) さん

顕彰理由

別府アルゲリッチ音楽祭の総合プロデューサーとして、同音楽祭を日本有数のクラシック音楽祭に育て、復興支援や子ども支援などのメッセージも発信し、日本の地方都市と世界の音楽界をつなぐ懸け橋の役割を果たしてきた功績をたたえ顕彰する。

略歴・実績

福岡県北九州市出身。ピアニスト・企画プロデューサー。東京藝術大学、フランクフルト音楽大学を卒業後、海外での演奏活動を活発に行う。1994年、長年親交のあるアルゼンチン出身のピアニスト、マルタ・アルゲリッチ氏と室内楽フェスティバルを企画。各地で成功を収めたのを契機に、別府市の委嘱を受け、企画プロデューサーとして、1998年に第1回別府アルゲリッチ音楽祭を開催。以降、毎年開催を重ね、アルゲリッチ芸術振興財団と、しいきアルゲリッチハウスの実現に寄与した。また、「復興支援CD」や、音楽を通じた子どもの育成のための「ビノキオコンサート」などの企画やエッセーの執筆も行っている。

三澤 洋史(みさわ ひろふみ) さん

顕彰理由

合唱団の指導、育成に卓越した力を発揮し、新国立劇場合唱団の専属指揮者として同合唱団を世界有数といわれるレベルに引き上げた功績をたたえるとともに、オペラ指揮者の陰に隠れがちな合唱指揮者の重要性に光を当てる意味も込めて顕彰する。

略歴・実績

1955年、群馬県生まれ。国立音楽大学声楽科を卒業後、指揮に転向し、ベルリン芸術大学指揮科を首席で卒業。オペラ等の合唱指揮者として活躍し、2001年からは新国立劇場合唱団の指揮者を務める。合唱指揮者は、稽古を指導するとともに、本番中は劇場の後方から団員に合図を出してオペラ指揮者をサポートする裏方で、スポットライトを浴びることは少ないが、重要な役割を担っている。プロ合唱団や海外のオーケストラの信頼も厚く、日本における合唱指揮者の第一人者として活躍している。2014年には著書「オペラ座のお仕事―世界最高の舞台をつくる」を上梓した。

気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング ドルフィンズ」

顕彰理由

宮城県気仙沼市を拠点に活動する中、東日本大震災に伴う津波で練習場所や楽器、譜面などを失ったが、国内外の支援を得て活動を再開。被災地で演奏し、楽器の寄贈を受けた米国でも返礼の演奏をするなど、音楽の力を復興や交流に生かしてきた元気ある活動をたたえ顕彰する。

略歴・実績

1993年、宮城県気仙沼市の音楽家らが、子どもたちに音楽の素晴らしさを伝え、音楽活動を通じて協調性や主体性を養い、郷土を愛する頼もしい青少年を育てようと結成。現在は小学5年生から高校2年生で編成され、ジャズを中心にさまざまなジャンルの曲に挑戦している。2011年3月11日の東日本大震災に伴う津波により、多くの楽器と譜面が流出したが、国内外の支援を受けながら、被災後も各地のジャズ・フェスティバルに参加するなど、演奏を続けている。2013年には米国を訪問し、楽器の寄贈を受けたお礼の演奏を行った。

山木屋太鼓

顕彰理由

福島県川俣町で旗揚げし、和太鼓の伝統継承と地域に根ざした若者育成の活動を続けてきた。地元が福島第一原発の事故に伴う避難区域に指定された後も、避難所暮らしをしながら練習を重ねて国内外で公演し、復興に向けた力強い意志を表現してきた活動をたたえ顕彰する。

略歴・実績

福島県川俣町を拠点に活動している和太鼓団体。和太鼓の伝統継承と、地域に根差す若者の育成と発展を目的に2001年結成された。メンバーは、学業や仕事をしながら和太鼓に取り組み、「美しい自然、そしてここが故郷」をテーマに曲を創作、演奏活動をしている。2016年3月には、インターネットで資金を募る「クラウドファンディング」と、町民を含め多くの支援・寄付で渡航

費の一部を工面して、米国ミシガン州で公演やワークショップを行い、和太鼓の魅力や、復興に向けた自分たちの姿を海外に発信する活動を成功させた。

第4回JASRAC音楽文化賞

ロビン・トンプソン(Robin Thompson) さん

顕彰理由

30年以上にわたり琉球古典音楽の研究及び振興活動に努めた成果として、2016年9月、楽譜集「琉楽百控(りゅうがくひゃっこう)」を著した。100曲の琉球古典音楽の三線譜、歌唱部を精緻な五線譜で表し、楽曲の形式等の分析、歌詞の英訳、ローマ字表記など、18世紀以降、口頭伝承されてきた琉球古典音楽の構造を内外の実演家・愛好家や、研究者に解き明かした功績をたたえ顕彰する。

略歴・実績

1950年、英国ロンドン生まれ。ロンドン王立音楽アカデミー及びロンドン大学を卒業後、日本の伝統音楽研究のため来日。1981年、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽学専攻修士課程修了。1982年、琉球古典音楽の研究・実演に着手。沖縄タイムス社主催の芸術選奨賞選考会の三線、胡弓部門のグランプリを受賞した後、ロンドン大学 東洋・アフリカ研究学院(SOAS)を拠点に、「ロンドン三線会」を結成、活動するなど、海外でも琉球古典音楽の普及振興に努めた。現在は那覇市首里に居を構え、琉球古典音楽野村流保存会、琉球古典音楽湛水流保存会の師範を務めており、雅楽、琉球古典音楽の新作など、和楽器のための曲を多数作曲している。

「團伊玖磨さんの音楽を楽しむ会」代表 中野 政則(なかの まさのり) さん

顕彰理由

團伊玖磨氏が作曲した、壮大なスケールを持つ作品をゆかりの地で、地域の人々と歌い継ぐ活動を長年にわたり牽引した。日の目を見ることのなかった合唱組曲を発掘・出版し、初演した。創作の舞台となった郷土と、そこに住む人々と作家の想いを、音楽の持つ力で、深く豊かに結びつけた活動をたたえ顕彰する。

略歴・実績

福岡県久留米市を創業地とするブリヂストン社勤務時代、同社が進めた文化活動を通じ團伊玖磨氏との交流を深めた中野政則氏が中心になり、2000年に発足した団体。九州ゆかりの團作品の公演を企画・実施しており、團氏逝去の翌2002年から5年をかけて、混声合唱組曲「筑後川」全5楽章を楽章ごとに各年"歌い継ぐ"コンサートを筑後川流域で開催した。2007年には、200人を超える団員によって、團氏終焉の地・蘇州市で同曲の中国初演を実現させ、以降毎年、團作品の公演を関係の深い場所で開催している。他方2013年、團氏による幻の合唱組曲「唐津」の自筆譜を発掘・出版し、作曲から34年目の2015年に全曲を初演、2017年10月、在京の合唱団 により東京初演。

「左手のアーカイブ」プロジェクト 主宰 智内 威雄(ちない たけお) さん

顕彰理由

"左手のためのピアノ作品"という貴重な音楽作品群に光を当て、埋もれた作品の発掘・紹介、作編曲の委嘱等に努めた。片手演奏の認知向上・普及振興により、障害のある演奏家を勇気づけた。幼児から高齢者まで広い層に片手演奏を紹介・指導するなど、音楽の新たな魅力と可能性を広げた活動をたたえ顕彰する。

略歴・実績

局所性ジストニアにより右手に運動障害が発症した後、「左手のピアニスト」として再起した智内威雄氏が、2010年に発足したプロジェクト。左手だけで弾くことのできるレパトリーが内外に不足している状況を打破するため、18世紀以降、散逸等で埋もれた状態にある楽譜を、音楽史等を頼りに約300曲集め、楽譜の出版、演奏会の実施、CDへの収録等を重ねているほか、左手だけで弾くことのできる曲の作編曲の委嘱も進めている。2013年からは、公開レッスン、発表会、講義を含むワークショップ形式の交流イベント「ワンハンドピアノフェスタ!」を実施している。

第5回JASRAC音楽文化賞

戸ノ下 達也(とのした たつや) さん

顕彰理由

明治の唱歌教育から今日のJ-POPに至る150年の歴史の中で、大衆に根付いた音楽文化がどのように生まれ変遷していったか、また変遷した理由を、史実に基づいて客観的に検証した。空白だった近代の日本の音楽史、特に戦時体制下での音楽の役割、営みを自著・編著で克明に浮かび上がらせた。

略歴・実績

1963年、東京都生まれ。専攻は近・現代日本音楽史。著書に『「国民歌」を唱和した時代』(吉川弘文館)、『音楽を動員せよ』(青弓社)、『戦時下音楽界の再編統合』(音楽の世界社)、編著に『日本の吹奏楽史』、共編著に『戦後の音楽文化』『日本の合唱史』『総力戦と音楽文化』(いずれも青弓社)、『戦う音楽界』(金沢文圃閣)、資料復刻の編・解題として『音楽文化新聞』(金沢文圃閣)など。『ハンナ』『音楽現代』では公演レビューや論考を掲載。また、演奏会の企画・プロデュースにも注力している。

普久原 恒勇(ふくはら つねお) さん・備瀬 善勝(びせ よしかつ) さん

顕彰理由

両氏とも沖縄市を拠点に、島唄、沖縄歌謡の名作を生むに留まらず、後継の音楽家を育てたほか、地域と密着したレコード店経営、音楽プロデュースを続け、沖縄文化に根差した多彩なジャンルの作品を全国に発信してきた。沖縄市が「音楽のまち」として栄える礎を築いた。

略歴・実績

普久原恒勇さんは1932年生まれ。戦後の沖縄民謡のヒットメーカーと呼ばれる。名歌「芭蕉布」から、琉球古典音楽の壮大な組曲「尚円」まで、意欲的な創作活動が有名である一方、創立91年を誇るレコード会社「マルフレコード」の音楽制作を担って、数多くの島唄、沖縄歌謡を送り出し、県内外の音楽家に影響を与えた。

備瀬善勝さんは1939年生まれ。作詞家として活動しつつ、沖縄市「キャンバスレコード」(レコード制作・レコード販売)を経営。数多くの島唄、沖縄歌謡をプロデュースし、沖縄文化に根差した幅広いジャンルの作品を送り出した。同市の音楽資料館「おんがく村」の館長も務めている。

認定特定非営利活動法人 鳴門「第九」を歌う会

顕彰理由

1918年、戦時下にもかかわらずアジアでベートーヴェン「第九交響曲」が初演された鳴門市で、全国の第九愛好家とともに長年、同曲を歌い継いできた。海外ゆかりの地での公演も重ね、初演を務めたドイツ兵捕虜の遺族とも交流するなど、史実として語られる100年前の奇跡的な公演の感動を、時代を越え、国境を越えて蘇らせている。

略歴・実績

1981年に結成、2013年に法人化された合唱団(大塚道子理事長)。鳴門市で毎年6月、全国から参加する愛好家と「第九交響曲」を歌い続けている。きっかけは第一次大戦中、同市に所在した収容所のドイツ兵捕虜たちが人権への配慮から文化活動等を認められ、1918年6月1日、アジアで初めて第九を全楽章演奏したという史実による。初演100周年を迎えた2018年6月の演奏会では、2日間にわたって日・独・中・米4か国の合唱団員計1,200人が熱唱する記念事業が催され、ドイツ兵捕虜の遺族らも招待された。海外においても、ゆかりの地で現地の合唱団と合同演奏会を重ねている。